

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第一主日(5/30)礼拝

「立ち直る信仰」

ルカ福音書第22章19節から第22章34節

【聖書】

ルカによる福音書 22:19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」
20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。21 しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。22 人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」
23 そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の中では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。28 あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。29 だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。30 あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

31 「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」
33 するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。34 イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

1 闘いの中

新型コロナウイルスの感染拡大が本格化して一年三か月。先週、国連の事務総長が

「我々はウイルスと戦争をしている。戦時体制の論理と緊急性が必要だ」と語ったというニュースが流れました。確かに、まさに今、これまでの常識が通用しない戦いの中にいることを実感させられます。新型コロナウイルスで命を落とした人も数多く、感染して苦しんだ人、後遺症に苦しむ人もいます。この一年三か月、私達はどこで感染するかわからない状況の中で暮らしてきました。少しでも体調が悪いと、「ひょっとして感染したかも。既に人にうつしているのではないか」と不安に思った事がない人はいないでしょう。趣味の楽しみを奪われ、真綿で首を締めあげられるような閉塞感を感じる日々。自死を選ぶ人も増えているそうです。あとどれだけこんな先行き不透明な日々が続くのか？そう思うと、無気力に足をすくわれ、苛立ち、自分は本当に弱い、と打ちのめされます。私自身、GWに体調を崩した時、自分の弱さを感じて気分が落ち込んでいました。そんな時、改革者カルヴァンの次の言葉が目飛び込んできました。「**自分の弱さとのあらゆる闘いのさなかに不安が極まるとき、信仰へと逃れる者は、既に大部分で勝利を収めている。**」(キリスト綱要第3篇2:17 R.ボーレン著「祈る」より 川中子義勝訳)。弱さとの闘いの中で、イエス・キリストを信じる事が大きな力になるのだと再び示されて、強く励まされました。

闘いと言えば、できたばかりのキリストの教会も闘いの連続でした。今でこそ世界の宗教人口の半数以上がキリスト教を信仰していると言われていますが、2000年前、教会はまだできたばかりで、弱く小さいものです。ローマ帝国によって多くのキリスト者が捕らえられ、拷問を受け、残虐な方法で殺されました。もともと同胞であり同じ神を信じるユダヤ人からの嫌がらせ、迫害は日常的にあったようです。教会内部の闘いもあります。イエス・キリストの十字架と復活、昇天、聖霊降臨の直後から、ユダヤ人のように異邦人も律法を守った上でイエス・キリストを信じないと救われない、と主張するユダヤ人キリスト者達が現れたのです。また、「神の御子イエス・キリストは人間にはならなかったし、十字架で死んでもいない」と主イエスの受肉と贖罪の信仰を捨て去った人々もいました。どのようにイエス・キリストを理解するかで、論争が繰り広げられ、時に激しい闘いとなりました。

そのような闘いの中にあつた教会が、常に支えとしてきたものは何なののでしょうか。主ご自身が、「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」と言って始められた聖餐です。「わたしの記念とせよ」―「私を想い起すには、先ずなによりもこのように行いなさい」と主ご自身がはっきりと仰つたのは、この聖餐だけ。出来たばかりの小さい教会は、どんなに激しい闘いの中にあつて、自分の弱さに呻いていても、主の聖餐に与り続ける事によって、頭を上げて前を向く力を貰い続けてきたと言えるのです。今日の聖書のみ言葉に触れるのは、三週目ですが、恵みは汲めども尽きません。今日、新型コロナウイルスとの闘いの中にいる私達は、聖餐の食卓での主の言葉から何を聞き取る事ができるのでしょうか。

2 主イエスの聖餐の食卓

私には、聖餐について、長い間気になっていた事があります。神学校の時に読んだ、ある牧師の経験談をまとめた本の中にあつた話です。教会のある信徒が、聖餐式でパンと葡萄汁を取らなかった、牧師は気になり礼拝のあと、「今日はパンと葡萄汁を取りませんでしたね」と尋ねると、彼女は、「私は今、聖餐にあずかる資格はないです」と答えたそうです。彼女は何か良心に責められるような闘いの中にあつたのでしょう。その牧師は、この話を肯定的にとらえているようでしたが、私自身は、ずっと引っかかっていました。「『今、自分は罪を犯しているから、聖餐に与れない、自分は聖餐には相応しくない』と判断して聖餐から遠のく、果たして、それが主の聖餐にふさわしい事なのだろうか」。かと言って、彼女を責めるつもりは毛頭ありません。寧ろ、主の聖餐を本当に大切に思っているからこそその態度でしょうから。だからこそ、猶更、釈然としない思いでおりました。

実は、彼女の態度には、聖書の裏付け、と言われるものもあります。使徒パウロは、ルカ福音書にある聖餐を定めた主の言葉を述べてから、次のように語っています。「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。」(I コリント 11 : 27 ~ 29)。実に厳しい言葉です。この言葉は、教会の歴史が始まってからずっと、常にその意味が問われ続けてきました。「罪を犯している者が聖餐にあずかることができるのか」、教会の実践の中での、実に具体的な問いかけでした。そして、この問題は、カルヴァンが、「自分の弱さとのあらゆる闘いに勝利を与える信仰」とも深くかかわっているように思います。自分自身を吟味して聖餐に与らないことが、果たして、「自分の弱さとのあらゆる闘いに勝利を与える信仰」を生み出すものなののでしょうか。

ルカ 22 章が述べている聖餐の様子を見て行きたいと思います。そこに招かれたのは十二人の弟子達。使徒たちです。主イエスを裏切ろうと企む者がいます、誰が偉いかという主の御心から最も遠い所での争いがあります、そして主イエスに最も近い所にいたペトロは、「死に至るまで、主に忠実に従う」と虚しく宣言します。裏切りと傲慢とうつろな言葉、それが最初の主の聖餐の食卓についた使徒たちの姿でし

た。しかも使徒達は、自分達がしていること、口にしていることが、どんなに主イエスの食卓にふさわしくないか、という事に、少しも気づいていないのです。彼らの本当の姿をよく知っていたのは、主イエスだけでした。

ですから、全くふさわしくない者達が招かれ、イエス・キリストの救いの恵みに与る、ということは、教会の聖餐の本質なのです。この事を忘れては、教会の聖餐を祝うことにはなりません。今ここに集まっている私達もそうです。私達のうちの誰が、自分は主の聖餐に、主の救いの新しい契約にふさわしい信仰の持ち主である、と胸を張って言える者がいるのでしょうか。いないのです。

主イエスの聖餐に与るとは、「自分の信仰は、イエス・キリストの救いに相応しい」という確信を得ることはありません、自分への自信を深めるものではないのです。寧ろ聖餐とは、私達が主イエスにはっきりと向かい合う事によって、自分の内に罪を見出すきっかけとなるもの、と言えるのです。私達が、主イエスの恵みによって、自分自身を吟味し自分の罪を知る場所こそ、聖餐の食卓だ、と言ってよいのではないのでしょうか。このことを私達は忘れてはならないと思います。

3 立ち直る信仰

では、聖餐の食卓に現れて来る使徒達の罪とは一体、何でしょうか。聖餐の食卓に現れている使徒たちの姿に共通に現れて来る罪、信仰者の罪とは何でしょうか。それは、「主イエスに対する信仰を徹底できない、貫くことができない」と言っているのではないのでしょうか。私達は、イエス・キリストの聖餐の食卓で、自分の中途半端な信仰、不信仰の罪と向き合うのです。自分の弱さとのあらゆる闘いに勝利する信仰を私達は、自分達の内に見出すことはできません。

ですが、どうしてそんな情けない不信仰な使徒たちが、後の時代に教会の中心人物、教会の柱になりえたのでしょうか？使徒たちの代表ペトロ、彼は自分の言葉に反して主イエスをいともたやすく「知らない」と宣言しました。しかも、逮捕され拷問され命の危険を感じて、「イエスを知らない」と言ったのではありません。大祭司の屋敷の女中に、「あなたもあの男と一緒にだった」と言われただけ。自分よりも弱い相手に言われただけで、もう「イエスなど知らない」と口にす、あまりにも情けないペトロです。しかし、不思議なことに、こんなにもあっさりイエスを否定したペトロなのに、何か大きな償い、教会の礎

になるのにふさわしい位に立派な償いをしたとは、ルカ福音書も使徒言行録にもどこにも、書いていません。ペトロは償っていないのに、後の教会の礎となりました。何故、かくも弱く情けないペトロが、使徒たちが、おびたしい苦難と闘う最初の教会を支える者、教会の柱となりえたのでしょうか？

その謎を解くのはただ一つです。32節の主の言葉「しかし、私はあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」。ここの「祈った」は完了形です。主は、「ペトロ、もう私はあなたのために祈ったよ」と言われます。それがいつかははっきりとは分かりません。しかし、次のように考える事は許されるでしょう。この最後の過越の食事において主イエスは杯をとり、パンを取って、感謝の祈りを捧げられた。そして、「これがあなたがたに与えるわたしの体である」と仰り、更に杯をとって、「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」と仰った、その時に、主は祈られた、「この弟子達が、聖餐の食卓にあずかり続ける限り、信仰をなくさないで生きている事ができますように、父なる神よ、どうかどうか」と。聖餐の食卓は、使徒たちの信仰の為に祈る主の御声が響く場所だったと思います。

ですが、その主の願いはあっさりと潰えたように見えました。この主の執り成しの祈りの後、半日も経たないうちに、ペトロはサタンに負けたからです。鶏が朝を告げて鳴くまで、彼は三度、つまり完全に、「主を知らない」と言いました。ペトロが三度目に主イエスを拒絶した直後のことをルカは次のように描いています。「まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、『今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と言われた主の言葉を思い出した。」振り向いてペトロを見つめた主イエスの眼差し、主の眼差しに包まれたペトロは、自分の本当の姿を知ります。ただ主イエスの憐みだけを頼りに生きざるを得ない自分の姿を知るのです。「わたしはあなたのために」祈った、もう祈った、主ご自身の予告どおりに、サタンに篩にかけられてしまったペテロ。しかし、そのペトロを主イエスは振り返られた。その眼差しに主の深い想いを感じて激しく泣くペトロ。主の食卓に最もふさわしいものとは、このペトロの涙ではないでしょうか。

ペトロの涙が示すもの、それは、どんな困難の中にも微動だにせず堅く立つという人が喜びそうな立派な信仰ではありません。そうではなくて、寧ろ、激しい嵐の中にあれば、大きく揺れ動く、だがしかし、

決しておれることない、冬の日、重い雪が覆いかぶさっても、決してその重さによってぽきりと折れる事はなく、地を這うように深くしなりつつも、時がくれば雪を跳ね返して頭を空に向けてもたげるような信仰です。何度、失敗してもあきらめずに、希望を持ち続けるしなやかさのある信仰。そんなしなやかさのある信仰を、異なる言葉で言えば、何度でも「立ち直る信仰」ともいえます。「立ち直る」のギリシャ語は、「悔い改める」「立ち帰る」という意味がある言葉だからです。どこに立ち帰るのでしょうか。

イエス・キリストに、イエス・キリストの信仰に立ち帰るのです。強そうに見えて、脆くて弱く吹き荒れる嵐にぽきりと折れる自分の信仰ではない、しなやかで強い折れることなき主イエスの信仰に立ち帰る、自分は、このイエス・キリストの真実、信仰がなければ生きてはいけないのだ、という処に立ち帰る。それこそ、自分の弱さととのあらゆる闘いに打ち勝つ力を持つ信仰と言えるのではないのでしょうか。私達は弱くとも、イエスは強いのですから。

代々の教会は、このイエス・キリストの信仰の力を、神の言葉の礼拝と聖餐によって、常に新しく得て来ました。そして、主イエスは、ご自身を信じる私達一人一人の為に、今も祈ってくださいます。私達が主イエスの信仰に立ち帰る事ができるように！と。

4 祈られた者の使命

そして、主の執り成しの祈りによって立ち直るといえるのは、なんの目的もなく立ち直るものではありません。主イエスによって立ち直らされた者には、一つのはっきりとした使命が与えられます。その使命に向かって立ち直ると言ってもよいのです。どのような使命でしょうか？信仰の仲間達に力を与えるという使命です。

では、どんな力を仲間にするのでしょうか。自分と同じく主イエスの信仰に立ち直ることができる力、言い換えますと、「自分を立ち直らせてくださった主の祈りの力を証する」ということでしょうか。「自分は、主イエスの眼差しと祈りによって生きている」と、主イエスの眼差しの中に立ちつつ、仲間たちもまた、同じ所に入り立つようと、招くのです。

ですが、時にそれはとても難しい事です。私達は、相手の欠点が見えて来るからです。しかし、見えて来た欠点は、よく見たらいいのだと思います。目をそらせることはありません。但し、仲間の過ちをど

のような眼差しで見るか、そこが問題です。自分が受けた主イエス・キリストの眼差しのように、相手を立ち直らせる眼差しになっているかどうか。それは、主イエスのように相手の為に必死に祈っているか、という事だと思います。この箇所からある牧師はこう言いました。「その人のために真実に祈るということなしに、その人への批判を口にはできない」、本当にそうだと思います。これはとても難しい事です。しかし、そうしなければ、結局、私達は、「誰が一番偉いか」という使徒たちが陥った過ちに立ち続けるしかありません。何度失敗しても再挑戦する価値のある事です。

何より自分の為だからです。私達は無意識のうちに、他の人を見るように自分についても見てしまうから。私達は主のような眼差しでは、自分も人も見る事ができません。自分が立ち直る為に、主イエスが祈ってくださったように、自分で自分の為に祈る事はできません。ですから、自分のような者は主イエス・キリストの恵みに遠いものだと諦めて、主の聖餐に与らないという事になります。ですが、主はその私の為に、私の仲間の為に、命を投げ出してくださいました。そんな私を、仲間を、人が言うように、自分がいうように、どうして、ダメな人間だと断定することができるのでしょうか。

主の食卓にあずかるということは、聖餐の言葉が示しているように、主イエスが私についても、私の仲間についても諦めてはおられず、祈っていてくださる、と知る事です。だから、私達が出来る事は、今、主が祈っていてくださっているという事に気づき、恵みを与えようとしていてくださる主の御心に応えるために、自分の心と行いを献げる事。自分自身も、自分が批判したくなる相手も、イエス・キリストの眼差しの中に置き、イエス・キリストに深く祈られた者としての姿を発見する事。そして、イエス・キリストの後に続いて、相手が立ち直る信仰に生きる事ができるよう祈る事です。

これからどんな困難が来るとしても、私達がどんなに自分達の弱さに呻くとしても、信仰の仲間と共に、主イエスの聖餐に与り続けていきたいと思えます。主の聖餐に与り、心と言葉をきよめて頂き、繰り返し立ち直る、しなやかな信仰に生きていきたい、教会の仲間と共に生きていきたい、と切に願う次第です。